2020年度後期
展覧会スケジュール

MAU M&L

Press Release 2020.07.21

武蔵野美術大学 美術館・図書館は、９月からの2020年度後期の展覧会スケジュールを決定しました。新型コロナウイルス感染症予防対策の一環で臨時休館を実施したことに合わせ、展覧会会期の調整を進めてきました。全体スケジュールと、後期第一弾として９月から開催する「脇谷徹――素描ということ」と「イラストレーションがあれば、」の２つの展覧会の概要をご紹介します。

9/21(月・祝)–10/24(土)

①**脇谷徹――素描ということ**（展示室２・３、アトリウム１・２）

②**イラストレーションがあれば、**（展示室４・５）

11/16(月)–12/19(土)

③**ドアは開いているか 山本直彰展**（展示室３・４）
日本画の新たな絵画表現の可能性を模索してきた作家の作品を展示します。

④**十時啓悦――樹木と漆と暮らし**（展示室２、アトリウム１）
木地作りから漆塗りまで一貫して手がけられた漆工作品の造形美に触れます。

⑤**(仮称)所蔵品展**（展示室５、アトリウム２）
近年の新規収蔵品を中心に展示します。

11/30(月)–12/19(土)

⑥**(仮称)ムサビのファカルティ展**（展示室１）
現在活躍中のムサビ出身の作家の作品を紹介します。

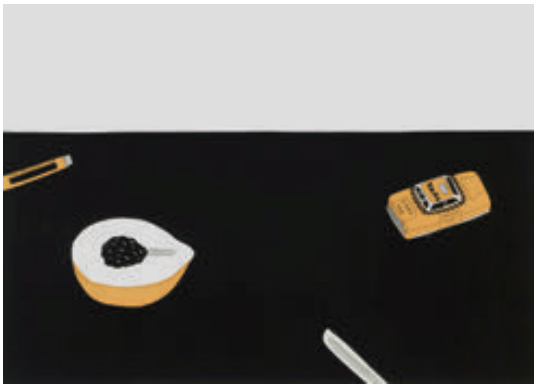
10/26(月)–12/19(土)

⑦**紙・木・藁にみる祈りの造形**（民俗資料室ギャラリー）
自然素材で作られた祈りにまつわる資料を中心に先人の発想の工夫を辿ります。

※2020 年度に実施予定だった「オムニスカルプチャーズ――彫刻となる場所」「所蔵品展――1960～1970 年代のグラフィックデザイン」「片山利弘――領域を越える造形の世界」は 2021 年度に延期になります。また、「(仮称) 助手展 2020」は中止となりました。

※新型コロナウイルス感染症の今後の拡大状況に応じて展覧会スケジュールは変更となる場合があります。ご了承ください。最新情報は美術館ウェブサイトでお知らせします。

① 脇谷徹《扉を開ける》2019 年



② 安西水丸《パパイヤ》1987 年

③ 山本直彰《ここ　HERE V》2019 年

④ 十時啓悦《根来片口》1999 年頃

⑦《宝船》(広島県)

お問い合わせ先：武蔵野美術大学 美術館・図書館 広報担当（鴻、内田）phone: 042-342-6003 fax: 042-342-6451 mail:prmsm@musabi.ac.jp

脇谷徹―素描ということ

Toru Wakiya―The Act of Drawing

MAU M&L

Press Release 2020.07.21

《箱デッサン》1985 年頃

《金属素描Ⅲ》1979 年

《扉を開ける》2019 年

《金属素描Ⅲ　デッサン》1978 年

《箱Ⅱ》1985 年

会期：

2020年9月21日（月・祝）

–10月24日（土）

会場：

武蔵野美術大学美術館

展示室2、3　アトリウム1、2

開館時間：10:00-18:00

（土曜日・祝日は17:00閉館）

休館日：日曜日　　入場料：無料

主催：武蔵野美術大学 美術館・図書館

協力：武蔵野美術大学 共通彫塑研究室

※会期などは変更になる場合があります。

武蔵野美術大学 美術館・図書館では展覧会「脇谷徹――素描ということ」を開催します。彫刻家・脇谷徹（本学共通彫塑研究室教授）の最初期の作品から最新作に至るまで、各時代の彫刻作品約50点と、素描・絵画を中心とした平面作品約150点を紹介します。

200点以上の作品を一望することで、脇谷が制作においてただひたむきに目の前にある対象物と向き合い、視覚的特徴や質感・立体的なヴォリュームをつかみ、実在性を浮かび上がらせようとしてきたさまが見えてきます。ありのままの「かたち」をつかむ行為全般を「素描」と捉える脇谷は、平面作品も立体作品も同じ「素描」の発露だとしています。装飾を取り払い、必要最低限の描線で空間の中あるいは紙の上に「素描」された「かたち」を目の当たりにすると、普段私たちがいかに印象や概念に影響されて事物を認識しているかに改めて気付かされます。

本展を通して脇谷徹の真っ直ぐで力強い作品世界と、造形における「素描」という表現の本質にふれていただければ幸いです。

本展の見どころ

本展は、２つの空間で脇谷の作品を紹介します。彫刻作品が一斉に並ぶ最初の空間は、油絵具を一筆ずつキャンバスに載せていくのと同じように鉄の板を溶接して重ねていった《金属素描Ⅰ》といった20代の頃の作品から始まります。油絵を学んだ脇谷ならではの作品ですが、すでに関心が対象の「かたち」をどう捉えるかに向けられていることが見て取れます。続く《箱》や《扉》のシリーズでは、中の空洞や奥の空間など、直接は見えなくても確かに存在する空間を「かたち」に落とし込むことに挑んでいます。

これらの彫刻は、脇谷のライフワークである人物の彫像の発展の軌跡とも呼応しています。いくつもの頭像を作る中で、脇谷は人の顔が持つ吸引力を改めて実感し、人体のありのままの「かたち」を見ることの難しさに気付きます。そこで《TÔGAI》では、モデルとなった自身の息子の顔をあえて省略し、中が空洞である頭蓋の構造も容赦せずに描き出して、愚直なまでに目の前の「かたち」と対話しています。

今回展示する新作《扉を開ける》は、こうした試みをさらに一歩進めた作品です。人物が背を向けて扉の向こう側へ入っていく瞬間を捉えたこの作品では、この人物の顔や表情を読み取ることができません。しかし、それゆえに人体のフォルムが前面に押し出され、素の「かたち」を描き出す「素描」としての新たな展開が認められます。

会場のもう一方の空間には、素描や絵画など脇谷の平面作品が並びます。ここでは、「かたち」を捉える試みが線描によってなされています。平面・立体の区別なく「素描」の本質に迫ろうとする脇谷の姿勢から、見るとはどういうことか、改めて向き合うことができる展覧会です。

※本展は脇谷徹教授の退任記念展として開催します。

《金属素描Ⅰ》1977年

《扉Ⅰ・棒が七本・内に》1996-1998年

《背中》1975年

《TÔGAI Ⅰ》《TÔGAI Ⅱ》 1984年

《長い髪》 2019年

作家紹介

《自画像》1974 年頃

脇谷 徹（わきや・とおる）：

1950 年 香川県生まれ、武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵専攻修了。1975 年に本学共通彫塑研究室助手となり、保田春彦教授・若林奮助教授の下で研鑽に励む。1977 年から「新制作協会展」（東京都美術館）で新作を発表し続け、1984 年の第 48 回と 1985 年の第 49 回で新作家賞受賞。1990 年から 1 年間、本学国際芸術都市田中記念アトリエ派遣研究員としてパリに滞在したのち、1991 年から本学共通彫塑研究室の助教授、1998 年からは教授として多くの学生の指導にあたる。その一方で精力的に作家活動も続け、2008 年の「阪神甲子園球場リニューアル記念レリーフ」などを制作。

関連イベント

作家本人による作品解説を含むギャラリートークなどを予定しています。
※日時や内容など詳細が決まり次第、当館 web サイトにてお知らせいたします。

［同時期開催展覧会］
「イラストレーションがあれば、」　9 月 21 日（月・祝）–10 月 24 日（土）

お問い合わせ先：
武蔵野美術大学 美術館・図書館
東京都小平市小川町 1-736
phone: 042-342-6003　fax: 042-342-6451
https://mauml.musabi.ac.jp

広報担当（鴻、内田）
mail: prmsm@musabi.ac.jp

展覧会担当（森、小川）
mail: forest@musabi.ac.jp
hogawa@musabi.ac.jp

プレス用図版をご希望の方へ：

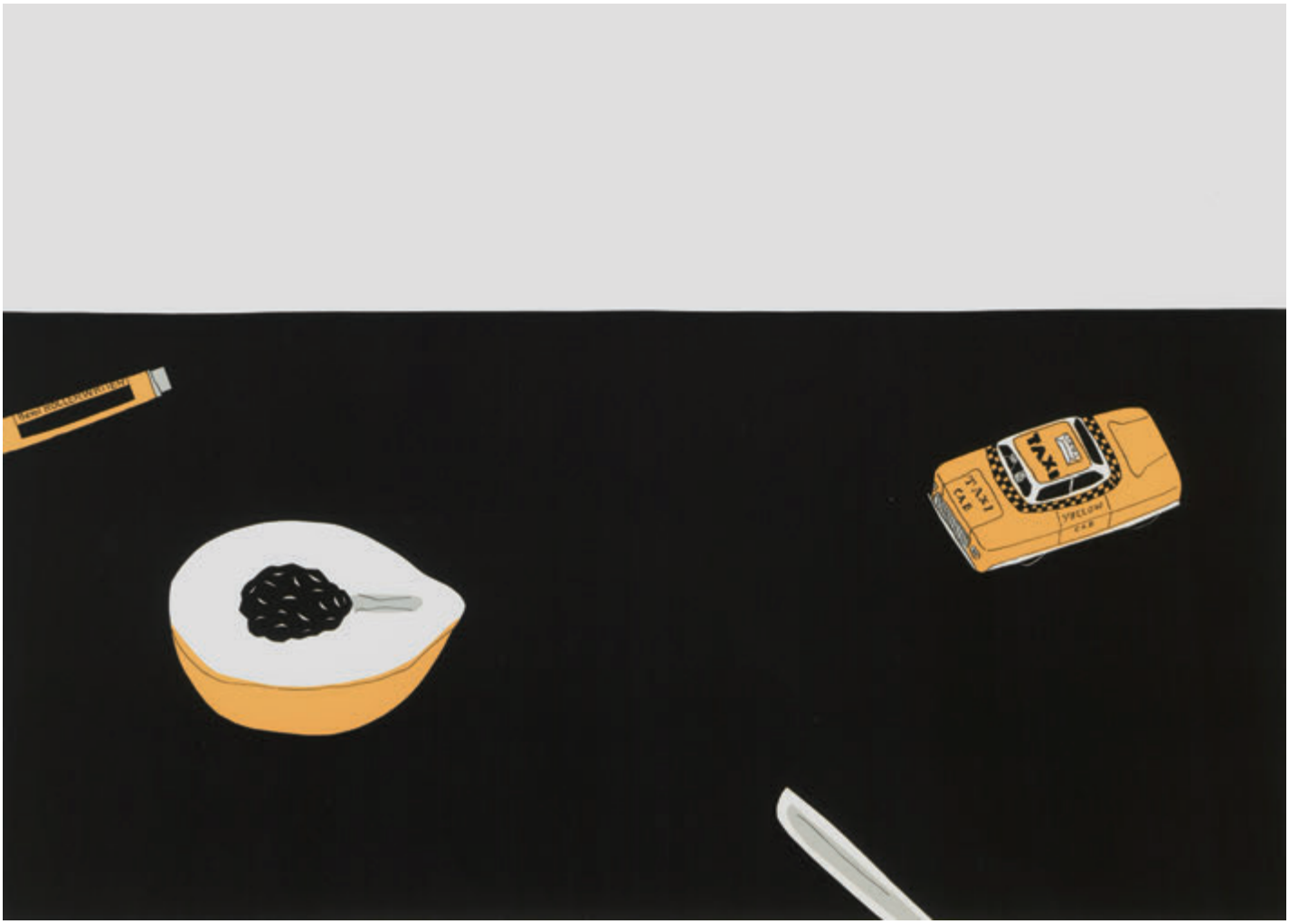
- 下記の注意点をご参照の上、ご希望の図版と、必要事項を E メールにてお知らせください。
（お名前、ご所属、電話番号、E メール、媒体名、掲載号、発行予定日、コーナータイトル）
- 指定のクレジットを必ず明記してください。
- 原則的には図版のトリミング、部分使用、文字載せはご遠慮ください。
- 掲載内容確認のため、発行前に PDF 等で原稿をお送りください。
- 紙媒体は掲載見本のご寄贈（掲載ページの PDF 可）、ウェブ媒体は掲載ページの URL お知らせをお願いします。

イラストレーションがあれば、

The Possibility of Illustration

MAU M&L

Press Release 2020.07.21



図版 1. 安西水丸《パパイヤ》1987 年

会期：

2020年9月21日（月・祝）
– 10月24日（土）

会場：

武蔵野美術大学美術館
展示室4・5

・18世紀フランスの哲学者ディドロやダランベールらによる『百科全書』、19世紀後半フランスで隆盛したリーブルダルティスト（画家による挿絵本）、宇野亜喜良や横尾忠則によるポスター、安西水丸のシルクスクリーンによる作品など、当館コレクションのなかからイラストレーションをめぐる作品を紹介。

・西洋と日本、幅広い時代の作品から、私たちにとって身近な「イラストレーション」の豊かな可能性を探る。

休館日：日曜日

開館時間：10:00–18:00（土曜祝日は17:00 閉館）

入館料：無料

主催：武蔵野美術大学 美術館・図書館

監修：赤塚祐二（武蔵野美術大学 油絵学科教授／武蔵野美術大学 美術館・図書館 館長）

［同時期開催展覧会］

「脇谷徹—素描ということ」

2020年9月21日（月・祝）- 10月24日（土）

本展の趣旨

図版 2.［世界地図］16 世紀ごろ

図版 3.『トリノ＝ミラノ時祷書』（15 世紀）ファクシミリ版、1997 年

図版 4.『ヴェル・サクルム』（アルフレッド・ローラー表紙絵）1898 年 1 月

図版 5. ジャン・コクトー『オルフェ』1944 年

イラストレーションと聞き、何を想像しますか。安西水丸の作り出すポップで爽やかな世界、宇野亜喜良の描く繊細で甘美な情景――みなさんの頭のなかには、様々なイメージが浮かぶのではないでしょうか。

西洋における〈illustration〉は、印刷技術の発展とともに書物や雑誌と深く結びつき、社会や文化を映し出しながら歴史を重ねてきました。日本では 1960 年代以降、イラストレーターの活躍をきっかけとして独自の発展を遂げ、今日的な〈イラストレーション〉の概念が一般に定着したといえます。美術評論家の中原佑介が、この広大なイラストレーションという領域を考える上で、なによりもまず「世界地図」を「世界のイラストレーション」と例に挙げたことは、少し意外なことに感じるかもしれません。

本展では当館コレクションより、中世の彩飾写本や 16 世紀の世界地図、現代のポスターまで、イラストレーションをめぐり幅広い作品を展観します。現代の〈イラストレーション〉の源泉ともいえる〈illustration〉の実体、日本の多彩な〈イラストレーション〉を生んだイラストレーターの存在を探りながら、その可能性を紐解きます。

1 章　　イラストレーションを考える

紀元前 3 世紀頃に創設されたアレクサンドリア図書館には、「挿絵入り書物（illustrated book）」が存在していました（注 1）。この史実は、イラストレーションの歴史がはるか古来より紡がれつづけてきたことを教えてくれます。

中世以降、西洋における〈illustration〉は、印刷技術の発達や出版文化の隆盛と不可分でした。図鑑のなかの細密な解剖図は有効な情報伝達手段として、小説に添えられた挿絵は読者のイマジネーションを喚起するものとして、書物を彩ってきました。折々の絵画様式と時に呼応し、生活や社会の流行に密接につながった多彩な表現は、時代の精神や思想を映し出す鏡ともいえるでしょう。

その歴史の先に日本に受容された〈illustration〉という言葉は、1900 年代にはすでに「図解」や「挿絵」と訳出されていました（注 2）。その後 1960 年代以降には、〈イラストレーション〉というカタカナ語として一般化してゆきます。〈illustration〉の受容から〈イラストレーション〉定着への変遷のなかで、日本におけるイラストレーションは一言では言い尽くしがたい、豊かで複雑なイメージを孕んでいったのかもしれません。

美術評論家の中原佑介は「世界地図は架空の 1 点から光をあてられた全世界のすがたである。それは明るみにだされた世界、つまり、世界のイラストレーションなのである」（注 3、傍点筆者）と記し、世界地図からイラストレーションを考察しています。1 章では、イラストレーションの語源として挙げられる「明るみにだす」という言葉を手がかりに、世界地図や百科全書、挿絵本など、15 世紀から 20 世紀初頭までの書物を中心にその機能と表現に触れ、〈illustration〉の実体を探ります。そこから、わたしたちの親しむ〈イラストレーション〉の源泉が見えてくるかもしれません。

注 1：鶴岡真弓『ケルト／装飾的思考』筑摩書房、1989 年
注 2：神田乃武等編『新訳英和辞典』三省堂、1902 年　など
注 3：中原佑介「イラストレーションと文化の顔」『見ることの神話』フィルムアート社、1972 年

図版 6. 多田北烏［キリンスタウト］1936 年

図版 7. 早川良雄［JAPAN AIR LINES］1958 年

2 章　　イラストレーターを考える

イラストレーションという言葉と同様に、イラストレーターという存在も私たちにとって馴染み深いものです。今日的な〈イラストレーション〉の概念はイラストレーターという「新種の職業」の登場によって初めて認識された（注 4）と語られるように、その存在が広く知られるようになったのは、そう遠くない昔のことといえます。2 章では、日本におけるイラストレーターの誕生と広範な領野へと展開する表現の軌跡を概観します。美術（ファインアート）に対する自身の立ち位置を問うた戦前の図案家、商業美術家団体による先駆的な活動、戦後復興期、急成長する社会との関係を築き上げた日本宣伝美術会（日宣美）によるグラフィックデザインの興盛はイラストレーター誕生の土壌を耕しました。その後 1964 年に発足する和田誠、宇野亜喜良、横尾忠則ら「東京イラストレーターズ・クラブ」の際立った活動の数々、黄金期といえる 70 年代以降に立ち起こる「スーパーリアル」「ヘタうま」といった多様なスタイルは、挿絵や図案、モダンデザインとは一括りにできない、今日的な〈イラストレーション〉の開花を物語ります。

社会変動の大渦の中、「アルティザン（職人）」「アーティスト（作家）」の二つの顔を持ち合わせる存在として、自身の立ち位置を模索し続けてきたイラストレーターたち。展示では、各時代の描き手による証言や当時の批評といった言説からその意識の変遷を辿るとともに、ポスターや雑誌、機関誌やレコードまで、多彩なメディアを通して、彼らが切り拓いた〈イラストレーション〉の可能性をご覧いただきます。

注 4：榎本了壱「特別な 50 年 デザイン イラストレーション アート」『日本のイラストレーション 50 年（ggg Books 別冊−1）』ギンザ・グラフィック・ギャラリー、1996 年

図版 8. 宇野亜喜良［初恋：地獄篇］1968 年

図版 9. 湯村輝彦［フラミンゴ・スタジオ］1976 年

お問い合わせ先：
武蔵野美術大学 美術館・図書館
東京都小平市小川町 1-736
tel: 042-342-6003　fax: 042-342-6451
https://mauml.musabi.ac.jp
美術館広報担当（森、内田）
mail: prmsm@musabi.ac.jp
展覧会担当（鳥越、大野）
mail: torigoe_m@musabi.ac.jp
to_ono@musabi.ac.jp

プレス用図版をご希望の方へ：
・ご希望の図版番号と下記の必要事項を、prmsm@musabi.ac.jp までお知らせください。
（お名前、ご所属、電話番号、E メール、媒体名、掲載号、発行予定日、コーナータイトル）
・掲載図版が 1 点のみの場合は図版 1.《パパイヤ》をお送りします。
・2 点以上の場合は、図版 1. ＋ご希望の図版をお送りします。
・指定のクレジット＋所蔵先（武蔵野美術大学 美術館・図書館）を必ず明記してください。
・原則的には図版のトリミング、部分使用、文字載せはご遠慮ください。
・掲載内容確認のため、発行前に PDF 等でレイアウトをお送りください。
・紙媒体は掲載見本のご寄贈（掲載ページの PDF 可）、ウェブ媒体は掲載ページの URL お知らせをお願いします。